

原著

## 「音符の言語化」によるリズム習得の可能性

戸川 晃子<sup>1)</sup>

### Possibility of Learning Rhythm by Verbalizing Musical Notes

Akiko TOGAWA<sup>1)</sup>

#### 要旨

「音符の言語化」を活用し、ピアノ初学者における効率的かつ効果的なピアノ教授法の確立を目指している。本研究では、「音符の言語化」によるリズム習得に着目した。学生に「音符の言語化」を提案し、提出されたことばの中から正しいと思われるものを専門家によって抽出し、再度学生はそのことばを発音しながら手拍子を行った。実践の結果、「音符の言語化」によるリズム習得の可能性が示唆された。

キーワード：ピアノ教授法、リズム、音符の言語化

#### Abstract

The author seeks to create an efficient and effective piano-teaching method for beginner players through the “verbalization” (i.e., adding words to) of musical notes. In this practice, the author focused on the acquisition of rhythm through the verbalization of musical notes. The author asked students studying how to play the piano to verbalize musical notes, and selected what appeared to be the most suitable work from the submissions. Students then pronounced the words in the notes, and clapped with the beat. The results of this practice demonstrated the possibility of learning rhythm through the verbalization of musical notes.

Key words: Piano Method, Rhythm, Verbalizing Musical Notes

---

1) 教育学部こども教育学科

## はじめに

本研究の目的は、保育士、教員養成校の学生を対象に、「音符の言語化」の有効性を臨床的に検討することにある。とりわけこの実践では、音楽学習者がリズムを習得するために、リズムをことばに置き換えさせること、そしてその置き換えたものを専門家（筆者や他の演奏家）の視点を介してフィードバックさせ、再び自ら考えさせる、こうした再帰的な取り組みに焦点を当てている。

本研究でいう「音符の言語化」とは、音符が示すリズムに適することばを当てはめる実践を意味する。なおここでは、モーラ（拍）による区切りではなく音節による区切りを採用する。例えば「おかあさん」は、「お か あ さ ん」の5つに分けるのではなく、「お かー さん」とし、3つの音符によるリズムとする。

本研究で行う「音符の言語化」の実践では、まず学生にバイエル49番の右手のリズムを提示し、学生はリズムに適したことばを提出し、その中からさらにより適したものを、実際に発音し、手拍子をつけるなどして精選していく取り組みを行った。先行研究では、教員が考案したリズムに適したことばを提示してきたが、本研究では、学生の考案による「音符の言語化」を収集し、検証し、リズムに適したことばを抽出する。そして、そのことばが学生のリズム習得に有効であるかを調べる。将来的にはその「音符の言語化」集を保育士、教員養成校の学生を対象にしたリズム習得のための教授法に用いたいと考えている。

### 1. 先行研究から見る本研究の意義

保育者、教員養成校の学生は、ピアノ演奏技術習得のための音楽の授業を履修する。しかし、入学時のピアノ初心者の割合は4割近くいるのが現状である<sup>1)</sup>。そのため、短期間で楽譜を理解し、演奏技術につなげるためのピアノ教授法が求められ

ており、平井<sup>2)</sup> (2016)、阪田<sup>3)</sup> (2018) など多くの保育士教員養成校の研究者による実践報告がされている。筆者 (2019) は、ピアノ初学者がリズムを習得すれば、演奏評価が上昇するという結果を定量的に導いた<sup>4)</sup>。そして、これまで筆者が実践してきた「ピアノを用いない練習」として「音符の言語化」<sup>5)</sup> をリズム習得に取り入れることはできないか考えた。

オルフの音楽教育では、ことばをリズム化することで生きたリズムを学ばせている。この「ことばとリズム」の関係を逆転させる試み、すなわち、音楽を言語化することを取り入れてはどうだろうか。ピアノ学習者は、正しいリズムが弾けない、レッスン後に自分で練習していると正しいリズムかどうか確認できないなど、何が正しいのかを持続的に認識することが難しい。それらを効率的かつ効果的に解決することに着目した。ひとつの音型を言語化したものをシステムとして把握できれば、異なる曲においてもその音型を目にした際、即座に適応でき、1人での練習時も簡単に確認できるのではないだろうか。

バルトークやヤナーチェクも「話し言葉のイントネーションやリズムが、音楽における感情表現に有効であると考えていた」<sup>6)</sup> と続けている。「言語の場合も、音楽の場合も、リズムに関する情報の処理は、脳の同じ部位で行われている可能性がある」<sup>7)</sup> という。

これらの背景を踏まえ、本研究では、これまで提案されてきた指導者の考案による「音符の言語化」ではなく、学生が考案した「音符の言語化」によるリズム習得の可能性を調べることにした。

### 2. 実践方法

本実践では、学生が、提示された音符のリズムに適すると考えることばを、LMS（学習管理システム：Learning Management System）のmanabaコースに提出し、そうして集まったものの中から

筆者が適していると考えるものを選出した。そして、その選出したことばを学生にフィードバックし、学生はそれらを発音しながら発音に合わせて手拍子したものを録音し、その録音ファイルをmanabaに提出した。なお、学生には、選出されたことばが、どの曲のどのリズムを対象にしたものかは知らせていない。

### 2-1. 実践手順

バイエル49番(図1)<sup>8)</sup>を示し、「右手のはじめ4小節は必ず」と条件を出し、リズムにあったことばを考え提出するよう求めた。提出された中から、明らかにリズムに適さないもの以外のことばを筆者が一覧にした(表1)。次に被験者は言語化されたことばの一覧(表1)のみを見ながら発音し、発音に合わせて手拍子した録音をmanabaに提出した。被験者にはどの曲を言語化したものかは知らせていない。また、一覧を見て練習をせず、初見

で録音することを条件として出した。その手拍子が49番右手のリズムと合っているかを審査した。

### 2-2. 被験者

保育士、幼稚園教諭資格取得を目指す学生2, 3, 4年生のうち本研究に同意した84名である。なお、被験者は1年次に音楽の授業を履修している。

### 2-3. 課題曲

バイエル49番の右手のリズム(図1)を提示した。同じリズムが反復されているものである。

### 2-4. 審査

筆者を含むピアニスト3名、打楽器奏者1名によって審査した。提出された音声が発音通りに打っているか、そのリズムが正しいかどうかを、Excelを用いて、文節ごとに○×で解答した。



図1 バイエル49番冒頭

表1 学生による言語化一覧

学生による言語化	
1	さああそびましょう さあおにきめて
2	オーストラリア
3	みんなであそぼう
4	チーズにトマト ケーキにいちご スープはおみそ
5	ぱんどができて えんぎもできて こんともできる かんじゃにえいと
6	みんなであそぼう さあはじめるよ
7	おおかみがきた みんなにげるぞ
8	エールをおくれ オールでこげよ

### 3. 結果と考察

提示された音符のリズムに適すると考えることについて、被験者のうち71名から提出があった。バイエル49番は同じリズム型の反復であるため、冒頭のリズムを基本とし、提出されたことばの中で、筆者がリズムに適切だと判断したものを一覧にした(表1)。筆者がふさわしくないと判断したものは、ことばのリズムと無関係に歌詞としてつけたもの、そして例えば表1の3「みんなでたべよう」の前に「さあたべましょう」と書かれたものがある。これは、「さー、たべましょー」と発音されるため、5つの音符からなるリズムになるだろう。このように文字の数と発音による音符の数とが異なる点が本実践の難しいところである。学生にとっても、その点が非常に迷い、難解なところであったと感じられる。他には「ゴーヤチャンプルー」というものもあった。「ゴーヤチャンプルー」と発音しながら手拍子すると提示した6つの音符のリズムになるが、実際は、「ゴーヤチャンプルー」と5文字の発音になり、5つ音符からなるリズムになる可能性が高い。提出されたことばには、以上のような例が多数あった。実際、本研究を始めた際の「音符の言語化」の定義は、「音符ひとつに一文字をつける」としていた。しかし、学生からことばを募集したところ、話しことばにおける発音数と表記されることばの文字数が異なり、リズムが必ずしも正しく表現されないことが判明した。それは、発音の速さによっても変わることもあり得る。本研究では「学習者が自分でリズムが正しいか否かを判断できる」教授法を目指している。このことから、本研究では、このように迷いの生じる例は省くことにした。

学生から提出されたバイエル49番冒頭のリズムをことばにしたものの中から、この定義でふさわしいものを筆者が抽出した。次に、学生は抽出されたことばの一覧(表1)を発音しながら手拍子したものを音声録音し manaba のレポートに提出し

た。提出された音声を研究協力者と49番の右手のリズムになっているかどうかを審査した。

音声を提出した被験者は53名であった。そのうち、ほぼすべてのことばにおいてリズムが正しく手拍子できていないのが4名いた。その原因としては、「発音しながら発音に合わせて手拍子する」という指示が伝わっておらず、拍子を打ちながら発音しているなどであったため、本研究の検証サンプルから除外した。

楽譜で示されたりズムに「音符の言語化」を提案した際、リズムが正しく表現できていると判断されたことばの例は7名のものであった。しかし、フィードバックされた「言語化」の一覧を手拍子した際は、表1の7番を除く、すべてのことばで45名程度の被験者が正しいリズムで手拍子をしていた。

7「おおかみがきた」に関しては、「お お」と2文字をそれぞれ発音した場合と「おー」と1文字として発音した場合に分かれ、このことばは誰でもが混乱なくリズム習得できるものではないと判断された。5「(かんじゃに) えいと」は被験者が「えい」をどう捉えるかでリズム表現が変わるのではないかと考えられたが、ほぼすべての被験者がバイエル49番の提示されたリズムの手拍子となっていた。

これは、被験者に対し「もっとも印象に残っているものはどれか」というアンケートを行った結果、5「ばんどができて えんぎもできて こんともできる かんじゃにえいと」が最も多かったことから、学習のモチベーションが上昇した可能性もある。一方、「誰でも正しくリズムが再現できるものはどれだと思うか」の質問に対しては、2「オーストラリア」、続いて4「チーズにトマトケーキにいちご スープはおみそ」であった。

以上の考察から示唆されることは、誰でもが正しく実践できるものは、発音の数と音符の数が一致するか否かによるところが大きい、ということである。本実践においては、学生がリズムに適する

と思うことばを考案し、それを、専門家の目からその適否を判断して学生にフィードバックし、さらにそのフィードバックされたものを学生が再び表現して、その結果について学生自らが振り返るという方法であった。その結果、音楽学習者をはじめ、誰もが正しく、混乱なく、リズムを再現できるかどうかという観点からは、発音の数と音符の数が一致することばが選ばれた。すなわち、リズム習得において「音符の言語化」を効果的に活用しようとするならば、指導者には、発音の数と音符の数が一致することばを選び、指導することが求められるだろう、ということである。そして、そのことばでリズムを表現した際、学生のほとんどが正しいリズムで表現でき、リズム習得の可能性が示唆された。

今後は、この実践をほかのリズム型にも広げ、学生からリズム習得に適した言葉を収集し、学生によって選ばれた言葉を、実際にリズム習得にどの程度効果があるのかを実験し、検証し、「音符の言語化」集の作成をしたいと考えている。

## 謝辞

本研究は科研費（17K04825）の助成を受けている。

## 参考文献

- 1) 戸川晃子. 教員養成における<音楽>授業の試み. 神戸常盤大学緑葉. 2015, 第11号, 7-11.
- 2) 平井李枝. ピアノ「弾き歌い」指導法の研究. 宇都宮大学教育学部教育実践紀要. 2016, 第2号, 91-98.
- 3) 阪田順子. 保育者養成におけるピアノ指導法の提案—バイエル98番のリズム・モチーフに身近な発音‘アマナットー’を当てはめる習得法の試み—. 岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要. 2018, 35-42.

- 4) 戸川晃子. 演奏評価解析から導き出すピアノ指導ポイント. 神戸常盤大学紀要. 2019, 第12号, 9-15.
- 5) 戸川晃子. ピアノ教授法における音符を言葉にする試み—演奏技術向上への一可能性—. 神戸常盤大学紀要. 2016, Vol. 9, pp43-50.
- 6) フィリップ・ボール. 音楽の科学—音楽の何に魅せられるの?. 夏目大訳. 河出書房新社. 2013, 538.
- 7) 前掲書. 540-541.
- 8) バイエル. バイエルピアノ教則本. 音楽之友社, 39.